

〈証言〉戦後社会党史・総評史 構造改革論再考 : 加藤宣幸氏に聞く(上)

IGARASHI, Jin / 五十嵐, 仁

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

650

(開始ページ / Start Page)

64

(終了ページ / End Page)

72

(発行年 / Year)

2012-12-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008940>

構造改革論再考

——加藤宣幸氏に聞く（上）



政党書記としての立場から

本日はお休みの中、お招きいただきましてありがとうございます。私はご案内のとおり社会運動家ではなく、政党の書記を24年間務めました。社会運動家ならば、いろいろな大衆闘争の指導をするとか、あるいは国会議員になって立法作業に携わったとか、そういうことになると思いますが、そういう政治的な経歴ではないので、皆様のご関心に応えられるかどうかわかりません。政党の書記という身分というか職業に24年間ぐらい、それも敗戦直後、社会党結党直後から69年までというごく初期でした。

書記というのは、ご存じのように団体職員ということになります。政治活動に関与しながら給与は保障されているということで、生活のために働きながら政治活動をするということではない職業です。マックス・ウェーバーが、政党の書記というのは給与を保障されて政治にかかわる職業だと書いていますが、そういうことなのかなと思っています。

社会党の場合の書記というのは、事務職員とも言えますが、大きく分けて院内で働く者と院

外で働く者の二つがあります。院内は議員とともに調査したり、立法作業にあたる職員。院外は大衆団体と接触したり、あるいは組織の管理にあたったりする職員。

社会主義政党の場合、議会主義とはいいながら院外活動も重視するというような考え方で、院外活動に従事する者も人数的には結構多くいました。私は一貫して院外活動でやってきました。政党の書記はご存じのように党内の選挙で選ばれるという役員ではなく、執行機関から任命される職員ですので、そのような立場からのご報告ということをあらかじめお断りしておきます。

私の生い立ち

私は1924年生まれで、今年の6月で88歳になります。1924年（大正13年）というのは、大正12年に関東大震災があった、その翌年です。私が小学校に入ったのは昭和6年ですが、ご存じのように昭和の大不況の時代でした。労働者のストライキが頻発し、農民の小作争議がたくさん起きる。私の父親は労働運動家

本稿は、法政大学大原社会問題研究所の研究プロジェクト「社会党・総評史研究会」の第2回研究会の記録である。研究会は2012年5月20日（日）に法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階丸（円卓）会議室で開かれた。出席者は、五十嵐仁、岡田一郎、木下真志、鈴木玲、中根康裕、兵藤淳史、栢田大知彦、山口希望、横関至である。事前に加藤氏宛に提出した質問状にこたえていただく証言（本号）とその後の質疑応答に分かれているが、読者の便宜を考えて、適宜、中見出しを付した。（木下 真志）

で、当時は鉱夫労働組合の委員長と全国労農大衆党幹部をしていて東奔西走していました。いちばんの不景気時代で、本人の自伝によると警察のブタ箱に50回以上入ったというストライキの指導者でした。私はそういう中で育ったわけです。

思い出としては、昭和10（1935）年、これは戦前の最後のメーデーになると思いますが、母親に連れられて、父親が部隊の指揮者として警官に囲まれる中を行進するのを見ました。父親はその年に、労働者代表ということで労働組合の盛大な見送りをうけ横浜からアメリカへ行きました。そこで野坂参三氏と会っています。そして、トランクで4箱ぐらいの大量のパンフレットを持って帰ってきました。子供ですから、父親がアメリカへ行ったら何かみやげ物がもらえるのではないかと考えていましたが、パンフレットだけで何もお土産がなかった。干しぶどうだけはもらいました。それでよく覚えています。

そのトランクというのが、当時、日本にはまだなかったファイバーで作られた大きなトランクでしたが、それが四つありました。その翌々

年、昭和12年に人民戦線事件で一斉に検挙されます。その時、このパンフレットがコミンテルンから受け取ってきたものという証拠になるわけで、非常に印象的なものでした。

昭和11（1936）年は2.26事件の年です。その1週間前に総選挙があつて、東京第5区から全国最高点で当選します。社会大衆党からも18人が当選しました。反戦、反ファッショというスローガンをしっかり掲げ、選挙チラシにも大きく書いて、演説会場などにも戦争反対の垂れビラがありました。そこに当時の知識人、青野季吉、茅原華山、荒畑寒村、神近市子、妹尾義郎氏などが選挙応援弁士に立ったという会場風景を覚えています。

子供時代は、そういうふうにして育ちました。昭和12年7月に支那事変が始まり、12月に人民戦線事件での全国一斉検挙です。私も子供の時、寝ているところを自宅搜索されたということ覚えています。

私が小学校に入ったのは昭和6年、小学校を出たのは昭和12年です。東大の坂野潤治先生が、昭和の前期に大きな転換点有二つある、昭和6、7年と昭和11、12年だと書かれていま

加藤宣幸氏略歴

1924年（大正13年）6月27日 加藤勘十・きみの長男として出生。出生地は東京市芝区今入町23

1931年（昭和6年）4月 芝区白金尋常小学校入学

1936年2月20日 第19回総選挙で反戦・反ファッショを訴え、父、勘十全国最高点当選

1937年4月 東京府立電機工業学校入学

1941年3月 府立電機工業学校卒業・芝浦マツダ工業株式会社入社

1942年4月 府立高等工業学校2部機械科入学

1943年4月 東京工業大学燃料工学科に転職

1945年3月 都立工業専門学校（改称）機械科卒業。12月 自由新聞社入社

1946年1月 日本社会党本部書記局入局、青年部、組織部

1951～54年 世田谷区議、社会党世田谷支部書記長専従

1954年 左派社会党本部復職、地方議会部

1955年 日本社会党統一、組織部、教育文化部、機関紙局、機関紙経営局

1969年 社会党本部退職。株式会社新時代社設立、代表取締役就任

1992年 新時代社代表取締役退任

すが、たまたま私が小学校に入ったところ、出たところ。工業学校、昔の中学ですが、そこにいったのが昭和12年にあたります。また、家庭環境としても、父親が昭和12年に検挙され、2年間監獄に入るといって、ちょうど節目になっています。

私のその節々は、昭和7年の第1次上海事変が始まった前年に小学校に入り、昭和12年に支那事変が始まる時に卒業する。工業学校を昭和16年に卒業した年に大東亜戦争が始まり、高等工業学校は4年間でしたが、卒業した時に戦争が終わったというような環境で育ちました。ですから、時代区分で言えば戦中派後期になります。ただ、技術系の学校だったので兵役は延期でした。文科系は徴兵延期がなくなりますが、私の場合は延期のままで、結局、軍隊には行きませんでした。

敗戦直後の状況

戦争が1945年に終わって、私は翌年の1月から社会党本部に入ります。以下、社会党の中で青年部、組織部、地方議会部、教育文化部、機関紙部機関紙経営局長などをやり、1969年に退職しました。党本部を辞めてから政党活動には一切関わらず、どの党にも属さず、活動はしていません。関心は持っていますが、組織活動に参加しないことにしています。

こういう環境で育ったので、戦後、社会党に入ることにについて特に違和感はありませんでした。ただ、私たちは敗戦直後にグループで勉強会をやっていましたが、そこへ「人民社」という所から私の父親（加藤勘十）のところへ、たぶん原稿依頼か何かだったと思いますが、人が来た時に、新しく青年組織ができるから、あなたたちグループも参加しないかと誘われて会合に行きました。

この「人民社」というのは、共産党あるいは

社会党や労働組合ができる前の左翼の活動拠点だったのです。8月15日の敗戦から9月8日に東京に進駐軍が入ってくるまでの間、いわば権力の空白期間があった。その時に私も行ったことがあります。この「人民社」が銀座にあって、社会党系の、労働組合ならば高野実とその関係で鈴木茂三郎、加藤勘十、荒畑寒村など、共産党系の農民運動なら伊藤律、労働運動の長谷川浩とか、共産党系の松本健二、佐和慶太郎など、その後共産党から分かれる人たちも多く出入りしていたという拠点です。

後から知ったのですが、私たちが誘われたのは、最初の名前は共産主義青年同盟だったと思いますが、共産党系青年組織の準備会だったわけ。話の内容などは忘れてしまいましたが、暗いところで自己紹介もなく会合がもたれて、秘密めいた会合でした。そこに私は友人の矢野凱也君と一緒にいき、帰ってグループに報告しました。

そのころ、私の父親の家では旧日本無産党関係者でメモに書かれているようなメンバーがしばしば集まって、新しくつくる社会主義政党をどういう政党にするか、あるいは労働組合運動はどうつくるかということでもずっと討議を重ねていました。印象的だったのは、小堀甚二さんとか荒畑寒村さんの、戦犯なんかとは一緒にやらないで、独自の政党をつくるべきだという主張でした。

でも、大勢としては戦前の無産党の分裂を反省して、戦後は統一した社会主義政党をつくるべきだということに落ち着いて、社会党の結党になっていきます。労働組合も統一労働組合で行こうというような方向がだんだん出てきました。

社会党への入党

私たちのグループに対しても、社会党に参加

すべきではないかという説得もあって、我々のグループも討議した結果、全員、社会党に入ろうということになりました。そして、1945年11月2日の結党大会を全員で傍聴したというのが直接的な入党の契機です。

このように全員入党を決めました。私と矢野君は当時21歳で、いちばん若かったので、社会党青年部に入るべきだというグループの申し合わせになりました。やや年上の緒方秀一君は新聞記者になりたいというので機関紙『社会新聞』に入る。そのようなことで本部の職員に2人で青年部ということで申し込んだら、仮採用みたいな形で採用になって、以後二十何年間、専従生活をするようになりました。私は、本部があった新橋で働いていました。

当時の社会党は、新橋西口の第二堤ビルの3・4Fに党本部がありました。2Fはフタバという喫茶店で、3Fの大部屋に総務・組織・宣伝部・小部屋二つに青年部・農民組合が入った。4Fは新聞と中央執行委員会議室でした。ビルの1Fは焼けたシャッターが閉まらず浮浪者がうずくまっている時もある強制疎開の建物でした。以前の所有者の権利があるか無いかはつきりしないものを、結党大会で中央執行委員・青年部長になった中村高一氏が都会議員で東京都と交渉して党が使用することを認めさせたと言われています。

当時の職員の様子というと、青年部は、私ども2人は給与をもらっていましたが、そのほかに何人も常勤、非常勤者やその後、議員になったような人も何人が常時出入りしていて非常に活発に動いていた。その活動資金は当時、民主団体には機関紙用の紙の配給とか会議用のビールの割り当てがありましたので、それを一部使って、あとは横流しをして、その資金を活動費に充てるといって今では考えられないようなことをやっていました。

ただ、当時の書記局の様子で印象的なことをいうと、山崎早市さんという時事通信の記者が毎日のように社会党本部の中を自由に歩きまわっていたことです。GHQを監督するような立場の対日理事会での各国代表の発言などを我々に教えてくれて、世界情勢はこうだと情報を流してくれた。ところが、この人は後でわかったのですが、共産党の徳田球一書記長と直結した御庭番だったので、社会党本部のあらゆる情報は共産党本部に直接報告されていたわけです。

当時、専従職員はそう何人もいませんでした。まだすごいインフレの時代で生活は苦しくて、給与が出たといっても公務員の半分ぐらいだったのではないかと思います。ある時、浅沼稲次郎書記長の時代だったと思いますが、だれかが、あまりにも給与が安いのでもう少し上げてもらえないかという話を会議で出したら、浅沼書記長から、戦前はみんな無給でやっていた、君たちは給料が出るだけましだ、だいたいそんな考え方でいるのはおかしいと言われてしまい、みんな黙ったというような時代でした。それが当時の本部の様子です。

組織機構の改革

本日のテーマは構造改革についてですが、それまでの間、10年間ぐらい、私は青年部、組織部、教宣部、機関紙部というところにいました。構造改革論が提起される前、前段階という形で、社会党の組織の革新とか近代化というか、そういう動きを組織部にいた時にやりました。

その集約が組織機構改革答申案です。大会決定で機構改革審議会をつくって、そこで組織機構の改革、例えば国会議員の自動的代議員権をなくす、執行委員会の人数を減らす、ポスト別で執行委員を選ぶ、青年部は外に出して社会主義青年同盟にするなど、いろいろな大改革をやりました。

これは大会決定ということで中央執行委員会も口を出せない。そういう形で実行に移されました。内容はいろいろ問題もありますが、組織部の副部長ということで、これを起案したり推進したりというのが大きな仕事でした。

社会党は1955年に統一したのですが、その直後から綱領をもっとしっかりしたものになければだめだという議論が特に左派のほうからありました。私はそれをいきなりやり出すと、せっかく左右両党が妥協して綱領をまとめたばかりなのに、また階級政党か国民政党かなどと、いろいろ不毛な論争を始めるとまた党が壊れてしまうのではないかと懸念もあって、それをやる前に党の組織整備とか近代化をやるべきだと思ったのです。

社会党は結党直後から共産党の強い青森とか長野とかで社共共同運動というようなやりかたで共産党から組織攪乱をしきりに仕掛けられました。『赤旗』などを見ているとあちこちで、共産党と社会党は合同すべきだという決議が社会党の中から出て、いまにも社会党の組織が全部共産党になってしまうのではないと思われるぐらい書かれ、それに対処するため組織部にいて飛び回っていました。それから、左右社会党が統一した時に一緒に労農党も統一しますが、地方によっては、労農党と合同するのはいいが、この人物はどうしても入れたくないとか、そんなことがあちこちであり、それを説得しに歩くなどの活動をしていました。

機関紙の有料化運動

大会で機構改革が通った後は、直接の担当責任者として機関紙の有料化運動に取り組みました。『赤旗』には比べようがないのですが、社会党としても機関紙活動を強化しなければどうにもならないということです。左右統一をした時は、双方公称党員5万人ずつということでし

たから合計10万部、大判2ページの新聞を無料で配っていました。

しかし、左右両社会党5万人ずつと言っていますが、組織部で党員の再登録をやると、両方合わせて5万人ということで、とても10万人はいなかった。10万人というのは、議員の後援会員を党員に勘定したような数字でした。ですから、実際の党員の5万人を基礎に新聞の有料化を始めたのです。

最初、1～2万部の有料紙から始まって、逐次、新聞も2ページから4ページに、4ページから6ページにして、発行間隔も最初は旬刊だったのを週刊にし、週刊から3日刊というふうに変えて発行間隔を短くし、部数も増えて十数万部になりました。印刷工場も当時のお金で数千万円もする高速輪転機を入れ、印刷は当時の最先端で活字を使わないコールドタイプという電算写植機でやる方式を導入した。今は普通ですが、当時はまだ珍しく印刷業者が見学に来たぐらいです。

それを全部、党会計とは別の独立採算制でやり、編集部、現場の工員、職員を含めると200人ぐらいが機関紙局職員ということで、党の中で独自に働く体制がつくられました。私は経営局長というポストで、この運営に全力を傾けて働きました。今振り返るととても考えられないようながむしゃらな仕事をよくやったものだと思っています。

そのうち、機関紙局の編集部職員が公募で優秀な人たちが入ってくるようになったのですが、社会党本部の職員とは採用機関が違う。雇用が独立採算の機関紙局で、党本部の職員ではない。それは不平等ではないかというような議論が起きて、やがて本部職員と身分が統一されていくなどのことがありました。

その他、機関紙局活動で記憶に残るものとしては、法政大学助教授だった松下圭一先生にい

いろいろかわっていただいたことです。特に、機関紙局の中に資料室をつくり、職員も2人ほど配置して、そこで先生を実質的な編集責任者として『国民政治年鑑』、次いで『国民自治年鑑』という部厚い年鑑を毎年出版しました。

このように、機関紙局は機関紙『社会新報』の活動と並行して雑誌・単行本・パンフレットの発行など非常に活発な出版活動も展開しました。私は機関紙局の経営局長という立場で、この活動に専心しました。

これら各種の出版宣伝活動の活発化と表裏の関係で1956、57年ぐらいから構造改革論の提起が始まっていきますが、それが党の方針への活発な論議を呼び、それがまた出版活動を盛り上げるという良い循環を生みました。これらの現象は社会党としては空前の出来事だったので。

構造改革とトリアッチ

次に、構造改革とバルミーロ・トリアッチ(1893～1964)についてお話しします。これについては、松下先生が「日本の構造改革派はイタリア直輸入の系譜だけでなく、多様な発生源ないし理論系譜をもち、しかも相互に顔もほとんど知らない、ゆるやかな少数の理論家たちの、それこそ思考スタイルとしての総称でした。しかし、当時はまだ層として存在していた知識人層の間では、広く理論的影響力を持っていました。誰が中心ということもなく、全国各地でそれぞれ構造改革派を自称していた人々がいて、種々の研究会や同人雑誌、単行本、また『朝日ジャーナル』『エコノミスト』『世界』『中央公論』などのオピニオン雑誌で、個々に発言しています。全国でみても数百人どまりだったでしょう」(北岡和義編『政治家の人間力—江田三郎への手紙』明石書店、2007年、307頁)と述べています。

つまり、さまざまな雑誌や書評誌、『日本読書新聞』『図書新聞』とかそういうところにいろいろな方が書かれて、そういうものを総称したのが構造改革派というふうに言われたのだと思います。これに私も賛成です。

さらに、産別民同の細谷松太さんは、「構造改革派」を三つにくれると言われています。一つは共産党内部から出たもの、一つは社会党書記局から出たもの、一つは労働運動から出たものと三つの流れを指摘されています。私もこのくくり方でいいと思っています。

ご存知のようにイタリアのトリアッチの路線は、正確に言えば「構造的諸改良の道」というタイトルで呼ばれていたもので、当時、社会党の「構造改革」はイミテーションだと、共産党から出た構造改革派のグループの人たちからは、からかわれたことを覚えています。社会党の中で、私たちは主として佐藤昇、松下圭一氏からいろいろと指導を受け、『思想』に掲載された、松下圭一「大衆国家の成立とその問題性」(1956年11月号)、佐藤昇「現段階における民主主義」(1957年8月号)からも示唆を受けました。しかし、その2人の方からも、特別にトリアッチがいつこう言ったとか、こう書かれているとか、そういう形で教えられたことはありませんでした。

もちろん、その当時、大月書店から『現代マルクス主義』という全3巻の本とか、合同出版社からも『イタリア共産党の研究』『イタリアの道』『グラムシ選集』とか、たくさんイタリア関連の本が出ていました。それを拾い読み程度ですが、読みかじっていましたから、トリアッチの影響がなかったということはなく、影響は大いに受けましたが、社会党の構造改革派にとって直接、トリアッチがこう言ったからとか、そういう形でとり入れたということはありません。

「ブレーン」について

次に、ブレーンはいったかということですが、ここに至るまで、私どもが青年部から組織部をずっとやっている間、いろいろな先生に教わっていてお名前を挙げきれないぐらいです。構造改革論を政治路線にしていく直接的な過程では、佐藤昇、松下圭一先生の指導に大きな影響を受けました。山本満さんという方は、もともと『ジャパントイズム』の編集者で、法政大学教授もやられたと思います。

竹中一雄さんは元国民経済研究協会の会長で、エコノミストです。長洲一二さんをご存知の経済学者です。久保さんは、もともと中国研究所の方で、長洲神奈川県知事の下で副知事をやられました。こういう人たちが、江田三郎のブレーンと言われるような方たちです。構造改革の政治路線形成そのものについては、佐藤、松下さんの影響が大きかったと思います。

次に、初岡昌一郎氏がどうかかわったかについてです。これは結論的に言えば、社会党の構改革派理論をつくっていくのに大きくかわかり、強い影響力を持ったと言えると思います。その一例として、まだ29歳ぐらいの法政大学助教授で盛んに大衆社会論を提起されていた気鋭の政治学者松下圭一先生のお宅というか、下宿に私たち3人（貴島正道・森永栄悦・加藤宣幸）を連れていったのは彼ですし、それを契機に私たちは頻繁に先生から教えていただくことになり、先ほどお話ししたように社会党の機関紙活動にも深くコミットしていただいたのです。

佐藤昇さんについても、『思想』の論文を見て、すぐ彼を探し出し、私たちがお宅を訪ねる契機をつくったのも初岡氏です。それから、58年ごろですか、私たちは佐藤さん、松下さんの影響、方針を受けて、政治学者である田口富久治（当時は明大で、のち名古屋大学名誉教授）、増島宏（法政大学名誉教授）、北川隆吉、

中林賢二郎、上田耕一郎さんという方たちと1年ぐらい研究会を持ちました。その事務局も初岡さんがやりました。後でわかったのですが、これらの政治学者はほとんど共産党籍のある方ばかりで、上田さんはご存知のとおり共産党の幹部です。

さらに初岡氏は清水慎三氏や坪井正氏などの理論的な影響をうける関西の社会党青年部OBグループと多少ニュアンスの違うところがある私たちのグループとの間を調整したりしました。また、こういう先生たちの指導を受けたのかと思いますが新綱領研究会のテーゼを彼が起草しました。こういうふうに、深くかわされました。特に私個人はもともと理論派ではなく教育も技術教育を受けて、社会科学の理論を深くやったのではないので、初岡氏からはいろいろな影響を強く受けました。

共産党の反応

次に、構造改革に対する共産党の反応です。私たちの研究会に共産党系の方々が参加されていましたし、上田耕一郎氏は研究会で報告もされています。私たちが読んでいた『現代マルクス主義講座』などにも上田氏は執筆され、不破哲三氏も書いていました。ところが、ある時から突然、共産党が構造改革、構造改良というものの批判、反対に転じ、党内の構造改革派の人は除名されたり、批判されたり、排除されていくわけです。

それとだいたい同じ時期から、社会党の中の鈴木茂三郎派の人たちも、それまではイタリアの本などを持って構造改革を我々に宣伝するぐらいだったのが、一転して批判に転じたのです。それは共産党が反対を始めたころとほとんど同じだったと覚えています、その理由はよくわかりません。

しかし、いずれにしても日本共産党の場合、

六全協とか党章草案の策定とかで、機関誌『前衛』を舞台にして活発な論争があった時期です。それから国際的にもイタリア共産党を中心としたユーロコミュニズムの理論の発展とか、モスクワにおける世界共産党共同宣言、あるいはスターリン批判というような内外共産党理論の激動期で、それらの影響を受けたことは事実です。

西尾派の動向と「江田ビジョン」

次に、西尾末広派の動向についてです。西尾派というものをどういうふうに規定するかということで、お答えしにくいのですが、ただ、民主社会主義者としての立場を鮮明にされてきた京都大学の猪木正道先生が当時、江田ビジョンについて『朝日新聞』に大きく肯定的な評価を書かれていましたから、西尾派も支持したのだと思います。ただ、西尾派に支持されたことが、社会党の中では改良主義者に支持されたということで逆に攻撃され、党内力学的にはマイナスになりました。

次に、江田ビジョンについてです。これについてはいろいろ文献も出ていますし、特に申し上げることもないのですが、江田ビジョンは日光におけるオルグ会議での発言が新聞発表になったものです。その前の晩に東京・駿河台の山の上ホテルに江田書記長と先ほど申し上げた江田ブレインと言われる人たち、長洲、竹中、松下、山本満、佐藤昇氏などと私たちが集まりました。この会合の席上、竹中さんが社会党は社会主義政権をつくる、社会主義社会をつくると繰り返すだけでは一般国民にはよくわからない、もっと具体的にわかりやすく表現したらどうかと言われた。有名になった4項目の江田ビジョンというのを竹中さんが発言されたのです。これを江田書記長が聞いて、「いいじゃないか」ということで即決し、翌日発表したのです。

す。

当時、私たち書記局の3人は、党内手続きをすまさないでそういう発表をすると、内容はよくても、たちまち党内から攻撃されて非常なマイナスになるということで発表に反対しました。しかし、江田三郎氏は、そんなことはかまわない、そういうものに反対することがおかしい、そういうところから党の体質を改革するのだから、攻撃されるのは承知だと反対を押し切って発表したのです。案の定、党内から総攻撃を受け、江田さんは失脚し、やがて構造改革論なる政治路線も葬られる契機になります。党外の国民にはわかりやすいので、マスコミでは大きく評価され評判はよかったのですが、党内的にはご存知のような経過をたどりました。

構造改革論が採用されなかった事情

最後に、左派の動向で構造改革論が採用されなかったことについてはどうかということです。これも松下さんの評価をお借りしますと、「構造改革派は1960年ごろ、党内に江田派という形で政治拠点を持ったように見えるけれども、これは議員集団ではなくて、3人を中心として、それに地方活動家を入れた緩い少数のつながりにすぎない。だから、共産党とか社会主義協会とか、強い組織で動いているグループが反対ということで攻撃すれば、構造改革派というようなものは崩壊してしまう」と指摘されていました。そのとおりだと、私は思っています。

構造改革派というものは、当時の知識人やマスコミによって実力以上に喧伝されていましたから、伝統的な力を持つ左派が反撃すれば負けるのは当然だったと思います。また、理論的にも改良主義と言われるベルンシュタイン理論などをちゃんと踏まえただけで構造改革理論が構築されていなかったのも、当時から中津研二氏、

宇治守正氏、仲井斌氏などから、不徹底だという批判を受けていました。それに対して、我々は党内左派から改良主義と攻撃されるのが怖くて、構造改良という「改良」という言葉をやめ

て改革という言葉で、私が造語しました。このようなことでもわかるように、理論的にも脆さを内包していたわけです。ですから、敗れるべくして敗れたのだと思っています。(つづく)

——《法政大学大原社会問題研究所叢書》——

法政大学大原社会問題研究所／原 伸子 編著

福祉国家と家族

1980年代以降に福祉国家が縮減する過程とグローバル化の下で家族政策が主流となっていく文脈を、アメリカ、イギリス、ドイツ、スウェーデン、日本などの歴史的な事例を通して、理論的かつ政策的な観点から比較検証する共同研究。■A5版・上製・342頁／4725円

■ 主要目次 ■

第Ⅰ部 市場と家族	第6章 フランスの家族手当と家族政策の歴史的転換
第1章 市場と世帯経済	第7章 ドイツ社会国家と家族政策
第2章 福祉国家の変容と家族政策	第8章 ひとり親家族の子育てと福祉援助
第3章 第二世代の両立支援と労働法	第Ⅲ部 家族と女性の歴史分析
第Ⅱ部 福祉レジームと家族政策	第9章 近代日本の企業福祉と労働者家族
第4章 アメリカの福祉改革	第10章 イギリスにおける女性労働と古典派経済学
第5章 イギリスの成年後見法にみる福祉社会の構想	第11章 雑誌『青鞥』における「堕胎論争」の一考察

法政大学出版局 〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7 <http://www.h-up.com/>
TEL 03-5214-5540/FAX 03-5214-5542 ※表示価格は税込みです